



## 教科、学習活動をつなぐプラットフォーム

教科や行事など本校でのすべての学びを一つの理念でつなぐファイリングシステム「平和共生 LogBook」を作成。すべての教科が「平和」「共生」というテーマで行う学習項目をルーズリーフページに記載、3年間ファイリングして蓄積する学習記録ノートという意味合いを持つ。聖書・礼拝での学びや、キャリア教育に関する取り組みも対象とする。基本コンセプトは以下の3点。（取り組み内容例は前頁）

- すべての教科が平和共生教育という視点で有機的につながっていることへの理解。
- 社会の諸問題を平和共生という視点から見つめ直す習慣の確立。
- 生徒 1250 名全員がこの価値観を大切にしている仲間であるというアイデンティティの共有。

## 個人の学びの場としての平和共生論文

平和・共生に関する考え方や理解を自ら関心のあるテーマに基づいて掘り進めていく「平和共生論文」の執筆活動。（執筆過程は前頁）

実際の執筆は2年生の秋から始まり、春休み後に書き上げた作品を提出する、という工程をたどる。

## 学びの共有

毎年12月に外部の学校・教育関係者、保護者をお招きして、成果発表会を行っている。様々なスタディーツアーで培われた学びの発表、代表生徒の論文の発表、養われた共生マインドに関する英語でのディスカッション等をお見せし、校内で進められているSGHの学びを広く外部の方に発信してきた。

外部に発信するSGH成果発表会と併せて、内部で学びを共有するグローバル・ウィークという催しも持っている。社会課題に取り組んでいる生徒の学びや、ボランティア部の活動、スタディーツアーでの学びを全生徒や教員と共有する一週間を、6月と10月に実施してきた（グローバル・ウィークⅠ、Ⅱ）。毎日の礼拝のメッセージを基調として、生徒が主体となり、NGOや国際機関の協力も得て、昼のセッションや放課後のワークショップを実施してきた。

## 「自分ごと」として、捉える仕掛けづくり

SGH指定当初は、スタディーツアーの学びを全体に伝え、二次体験者を生み出すことを目指していたが、サービスラーニングのメソッドを取り入れて、発題者のプレゼンを基に生徒個々の周囲に起こっている問題を探させる方向性へ移行していった。海外の貧困国で起こっている問題が、ここ15年間で、国内の身近な課題として検証し、取り組むべき構造にあることが分かってきた。他人事ではなく「自分ごと」としての体感を得られる現場を用意し、生徒に働きかけていく。論文の取り組みにおいても一層情熱が注がれることになる。

## グーグルクラスルームの採用

本校では、サービスラーニングの取り組みにグーグルサービスを用いている。（セッションやワークショップの参加者募集、クラス化、教材提供等）

プログラム参加後はリフレクションフォームを送付し、再グループ化したり、自身の振り返りを行わせたりしている。最終的にまとめた学びの記録は、eポートフォリオに清書し、蓄積する。

この手順を普段の学習やクラス・委員会・部活動に活用しやすくするために、来年度より生徒1人1台タブレットが配布される予定である。

## 青学大との連携（SGHプログラム関連のみ）

- 論文執筆指導（アカデミックライティングセンター）
- 現場リソースと学びのノウハウの提供（ボランティアセンター／サービスラーニングセンター）
- 青学大「サービスラーニングⅠ、Ⅱ」講座への本校生徒の出席（来年度より）
- チャットリーダーとして青学大留学生を本校に招聘（国際センター）
- 青学大協定校留学プログラムの早期斡旋、資格試験となるIELTS講座の提供（国際センター）等